



2階南側の部屋

### 旧津倉家住宅の障子を張り替え、見違えるほど明るく

障子張りの仕上げとも言えるのが、障子の枠や棧からはみ出した紙を、サイズに合わせて切る作業。地味な作業ですが、これがいかに仕上がらなければ完成したとは言えません。真っすぐに切るためのガイドとして物差し

紙貼りを済ませ、糊が乾いたら、通路へ運んで立て掛け霧吹き作業。糊が乾き始めたら紙全体に霧を吹きかけ、乾けば紙がピンと張ります。

障子紙を「貼る」のに、障子を「張る」とはどうでしょう？それは、障子紙を貼るだけではなく、皺のないようにピンと張る必要があるからです。懐かしい作業は決して楽ではありません。

障子に貼られていた古い紙はもろろ和紙だったので、新しく準備した障子紙はナイロン繊維なども漉き込んだ洋紙。丈夫で破れにくい洋紙は、丸まった紙を平らに貼って、皺なく張るのは思った以上に大変です。子供の頃、自宅の障子の張り替えを経験した会員にしても、もうずいぶん長い間やっていません。「あーだ、こーだ」言いながら、チューブ入り糊と希釈糊とを使い、貼って、貼って。



糊を拭き取るのが大変でした



「あくどくだ言いながら作業

記事 斉藤朋之

を当てたり、糊代ギリギリで紙に折り目を入れたりして、カッターナイフで一気にかつての掛塚繁栄の歴史と文化を、未来へと語り伝えていくのが、私たち「みんなと倶楽部 掛塚」の役割。旧津倉家住宅は、そんな歴史や文化を目に見える形で残している大切な文化遺産です。そんな思いを忘れずに、慌てることなく、地道に少しずつ、古くなった障子紙の張り替えは今後も続けてまいります。

# ちよつといーけ？

温故知新！掛塚を知る「にーさ・ねーさ」の方々に、掛塚生まれの主婦二人組（のりこ&さゆり）がインタビュー。今回は、砂町の鈴木ちずさんにお話を聞いてきました。

鈴木ちずさん 大正十年生 98歳(砂町)

掛塚生まれのちずさんは、とてもかわいらしいお婆さまでした。今回のインタビューは、娘さんとお孫さんにも一緒にお話を伺いました。

ーご結婚は何歳の時でしたか？

二十三歳で結婚(浜松)して二十四歳で子供を産んだね。あの頃は戦争で男の人がいなくなつて、結婚するにもなかなか相手がいなかったの。

ー当時の結婚の様子は？

結婚式といつてもお祝いなんか出来ない。空襲で敵が来んうちにちよつといろんなことやつて、簡単に結婚式をして。その夜も空襲があつてね、防空壕は家の中にあつて床を上げて穴を掘つてある。その中にすくんでるだよ。夜も眠る事なんかできない。ブンブンブン、空襲がひどくてね。

浜松への空襲がひどくなり、身重のちずさんは掛塚の実家に身を寄せました。

ー出産の様子は？(昭和二十年四月)

昔は病院なんかないからみんな産婆さんでね。戦争がだんだんと激しくなつて、子供を産むつて言つても「敵が来ない静かな時」に産まにゃいかんかった。どうにか産んでも空襲がひどくてねえ。

ー空爆・艦砲射撃の結果・・・

そのうちに浜松は爆撃で火の海になった。艦砲射撃は浜の方から「ダー」つて撃つてきて・・・浜松は真っ赤になつて家々はみんな焼けてしまった。

掛塚橋は半分落ちていて行ったり来たりできやしない。途中から河川敷に降りて。河川敷から橋が作つてあつて、そこを渡つて川西・浜松へ行つただけ、道路もくしゃくしゃでどこがどこか分からんかった。

終戦の数日前、ちずさんはご主人を亡くされ、そのまま掛塚で生活することになりました。



ー戦後の暮らしは？

少しでもお金をと縫い物を一生懸命にやつたね。訪問着の裾模様はたくさんやつたに。あの頃は忙しくて夜なべしてね。体調を崩して縫い物をやめて、畑を借りて好きな畑仕事をやつてからは身体も丈夫になつたね。

大川橋蔵が大好きで「新吾十番勝負シリーズ」は嵐の日でもバスに乗つて浜松まで見に行つたね。帝国館へも映画や芝居、レビュウを楽しみにして行つたに。

ー宮大工をされていた頃のお話をお聞きました。

現在分かつている宮大工の歴史は庄吉さん、宇平さんちずさんのお父様、武夫さんの3代です。庄吉さんは砂町の屋台を、宇平さんは掛塚郵便局を、武夫さんは浜松の五社神社を手掛けています。見せていただいたアルバムには他にも「加藤トコバ」と書かれた写真や金洗の大きなお宅の建前の様子が残っていました。

現在もその姿を残している建造物もあり、当時の掛塚職人の腕の良さがうかがえます。

「徳佐屋(とくさや)」という屋号は大工以前よりあつたそうですが、残念ながらどんな商売をされていたのかは分からないそうです。



● 旧掛塚郵便局



● 五社神社 上棟式



● 砂町 道囃子

大正・昭和・平成・令和の四つの時代を生きてきたちずさんには、たくさん辛い出来事と苦勞がありました。私たちがお聞きしたのはそのほんの一部ですが、結婚式や出産のお話からは戦争の怖さともにもその時代の女性の強さを感じました。壁に飾られた家族写真は毎年撮られていて、娘さん夫婦と孫家族に囲まれた素敵な写真でした。

「取材・記事のりこ&さゆり」

## みんなと倶楽部

My hometown Kaketsuka

### 第14号

P1 津倉邸の障子張り替え

P2-P3 福長飛行機展 at 旧掛塚郵便局

P4 ちよつといーけ？

鈴木ちずさん(砂町)

みんなと倶楽部  
My hometown Kaketsuka



- 会長 池田藤平
- 事務局 名倉慎一郎、大沢利行
- 編集 轟田茂巳、山内紀子、鈴木小百合、須田明広、長谷川智

お問い合わせ

ご興味のある方は  
下記までご連絡ください！

☎ 0538-66-4775 (名倉)



掛塚湊に廻船の姿がほとんど見られなくなった大正の半ば、それまで筏や解(はしけ)が行き来していた天竜川の河原に飛行場が作られました。この飛行場で、当初はほとんど飛び上がることもできず、地元民からは「ガ」飛行機」と揶揄されていたのが、数年後には国産初の旅客機を飛行させることに成功したのです。

これは、ちょうど100年前に、蟹町の西に作られた「福長飛行場」のことですが、大正8年の創立から数年の間に、いくつかの飛行機を生み出すと同時に、多くの有能な飛行家を世に送り出してきました。掛塚に存在したのはたった10年ほどの、ほんの短い間でしたが、そこで生み出されたものは、後の日本社会に大きな影響を及ぼすことになったのです。

このときから50年後の昭和44年には、アメリカのアポロ11号が月に着陸し、ジャンボジェットが就航し、百年後の今年には、3億キロも離れた小惑星に日本の衛星が到達しました。技術の進歩の速さをつくづくと思いが知らされますが、「福長飛行場」はその原点であり、掛塚はその舞台であったといえるでしょう。

みんなと倶楽部・掛塚では、旧掛塚郵便局で8月の土曜・日曜を中心に7日間にわたって「福長飛行機展」を開催しました。「福長飛行場」を作ったのは、浜松市の旧飯田村出身の福長浅雄です。その兄を、弟の四郎と五郎が支えて運営されていきました。展示開催中には、その福長三兄弟のご子孫たちも、たくさんおみえくださいました。特に、五郎の長男である福長利晴さんは、お持ちの資料を提供してくださるとともに、御高齢にもかかわらず、連日会場に詰めてください、直接飛行場に携わった人たちから聞いた話など、興味深いお話を聞かせてくれました。

また、福長兄弟の生まれ故郷の飯田小学校では、以前から全校をあげて福長浅雄を学んでいます。今回も複数の先生方が見学に見え、掛塚との交流を期待していかれました。

磐田市には飛行機に関連する史跡が複数あり、袖浦地区に明野飛行学校の天竜分教所跡、見付地区に大見寺の鳥人幸吉の墓、それに終戦直後、鯨島の海岸には緑十字機が不時着しています。その「緑十字機不時着を語り継ぐ会(緑語会)」のメンバーの方たちもたくさん来てくれ、将来連携していくことを約していきました。それぞれ時代は違いますが、その時代における重要な意味を持つ史跡です。これを磐田の誇りとして後世に長く語り伝えていきたいものです。

記事：名倉慎一郎

### 福長飛行場100周年記念展によせて ～福長利晴

この度は皆様方のご努力によって100周年記念展が開催されましたことに感謝し、厚くお礼申し上げます。

大正8年の福長飛行機研究所の開設から、令和元年9月でちょうど100年となります。その間、飛行場関係者などは他界され、当時の状況を知る人はなくなりました。今、残された写真等により、当時の様子を垣間見ることができました。

私は、福長飛行士3兄弟の3番目、五郎の長男で、大正14年(1925)に生まれ、現在、金洗に住んでおります。

福長浅雄の出生地は、浜松市飯田(大塚町)ですが、兵庫県川西に製材業を興し、ドイツより最新動力製材機を導入して事業を成功させました。浅雄は、子供のころからの空を飛ぶ夢を実現させるため、製材業に打ち込みながら、フランスから練習機2機を買い入れ、飛行研究を行っていました。23歳で羽田飛行学校に学び、大正7年、津田沼の伊藤飛行機研究所に入所し、飛行技術の習得に努力しました。この時、同研究所を設立した伊藤首次郎より「恵美」号を譲り受けて、「天竜3号」としました。大正7年7月1日、天竜3号により郷土訪問飛行を行いました。これは中野町鉄橋附近の天竜川河原かと思われ。のちに、ふるさとの空を飛ぶことで、心が激しく踊ったと言っています。当時の新聞によると、浜松の人口が5万8000人であった時に、郷土訪問飛行を見るために集まった人々は4万人だったと報じました。

浅雄が自らの飛行機研究所をどこに建設するのか、適地を探していたとき、郷土訪問飛行の折、上空から河原に大きな小屋が見えたことを思いだし、この小屋に、一時的に飛行機を格納することができると思いついたといわれています。

四郎、五郎も大阪で仕事をする傍ら、飛行研究を行っ



ていたのですが、浅雄が26歳の時、故郷に戻り、掛塚で飛行士の道に進むことになりました。天竜川の河口は、日本の中央であり、東京にも、大阪にもおよそ250kmのところで、東西文化や情報の行き交う所でした。また、急激な天候変化の時には、海岸線を低空で飛ばせば天竜川に出ることができ、これが掛塚に飛行場を建設する理由ともなりました。

飛行場は130万坪、南北5200m、滑走路は300mの河原でした。飛行場は、格納庫120坪、中には工場も設置されました。ここでは、飛行機の製作、パイロットの養成などが行われ、若い人たちが集まりました。福長兄弟を始め、鳥居清次、根岸銀蔵、今井小松、赤池万作など多くの優秀な飛行士が育っていきました。掛塚では、廻船業、造船業が衰退し、その技術者が飛行機の製作に携わり、大工、機関整備、エンジン、鍛冶、塗料など、それぞれに活躍し、四郎、五郎も各地の飛行大会に出場し、飛行機の普及のため、操縦、航空の意義を高めるために奔走しました。

福長浅雄は私財を投入し、製材所の利益を飛行場につぎ込みましたが、この飛行場で収入を得ることは簡単ではありませんでした。日本最初の6人乗り旅客機、天竜10号は、3年の歳月をかけ、約3万5000円の費用を費やして製作されましたが、多額の出費のため資金不足となり、株式会社経営となりました。掛塚の多くの人たちが株主となって、配当できない福長を応援してくれたのです。その心意気を買っていたいたわけ、有難いことと思えます。

浅雄は、大正11年、「天竜10号」を完成させ、旅客輸送を実現しようと考えていました。大正10年には、陸軍省に初めて航空局が設置され、三方原飛行場で車体検査が実施されることとなりました。福長四郎が操縦者、検査官は永淵大尉で、乗客の重量分の砂袋が乗せられて、繰り返し飛行検査が行われた結果、技術力

### たった数年の輝き

大正8年に設立された「福長飛行機研究所」は、10年には「株式会社福長飛行機製作所」と改称し、12年には経営悪化のため三兄弟が退社します。「天竜6号」から「天竜10号」までの飛行機が製作されたのはこの数年間で、それ以後は、飛行機の修理が専門となり、設立から10年後の昭和3年には、天竜川の改修工事のため、三方原への移転を余儀なくされました。

### 国産初の旅客機製作

大正11年に作られた「天竜10号」は、日本で最初の旅客機でした。乗客4人を乗せ、飛行士はその後ろに2人乗りました。旅客の代わりに砂袋を載せた飛行試験には合格したものの、旅客機を就航させるための法整備が整わず、乗客を乗せることなく格納庫でホコリをかぶったまま終わってしまったといえます。

### 天竜川の河原が飛行場

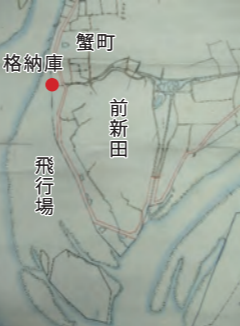
現在の御飯屋は、昭和4年から進められた天竜川の改修工事により現在地に移転したもので、それまでは現在地から50メートルほど西に在りました。その西側に格納庫があり、更にその西側の河原の、南方に5000×600メートルが第一飛行場でした。その南に第二飛行場がありました。砂利の河原で、水が出れば飛行場は使えませんでした。

### 地元掛塚の期待

第三回の営業報告書では、株主201人のうち、掛塚の人が84人を占めています。多くは小口の株主でした。一株でも福長飛行場を応援しようとした掛塚の人たちの心意気が窺われます。また、福長飛行機製作所の社長は長谷川鉄雄、取締役は白羽の松下定七、三方原に移ってからの社長は川袋の村上浜吉、専務は新町の中村喜三郎と、経営陣は掛塚ゆかりの人たちが就任しています。

### 後の航空界を担った人材

14歳で福長飛行場の練習生となった鳥居清次は、芳川村御給に生まれ、昭和4年に日航に入社、戦後は全日空の専務取締役となりました。赤池万作は、東京瓦斯電気工業のテスト・パイロットとなり、今井小松は女流飛行士として「雲のじゅうたん」のモデルの一人となりました。その他、福長飛行場から育った人たちは、航空界で大いに活躍しています。



●福長飛行場格納庫



●天竜10号

令和元年8月11日